

平成 22 年 度 教 育 研 究 業 績 書

氏名 上野 誠

最終学歴	1990年3月 国学院大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学（日本文学専攻）	
取得学位	博士（文学、文乙第7号）	
所属学会	全国大学国語国文学会学会賞選考委員、上代文学会理事、万葉学会編集委員、日本文学協会委員（1999-2002、2005～）、民俗芸能学会編集委員、美夫君志会常任理事、古事記学会理事、国学院大学国文学会委員、日本山岳修験学会評議員	
専門分野	万葉文化論の方法論の摸索、折口信夫の方法論の再検討	
研究課題	万葉文化論	
授業科目	学部担当科目	<ul style="list-style-type: none"> ・国文学史Ⅰ（前期） ・国文学史Ⅲ（後期） ・神話伝承論（前期） ・国文学講読（一）（通年） ・演習Ⅰ（一）（通年） ・演習Ⅱ（二）（通年） ・世界遺産学概論Ⅱ（後期） ・奈良文化論Ⅱ（後期）
	大学院修士課程担当科目 （博士前期課程含）	<ul style="list-style-type: none"> ・研究演習（六）（通年） ・東アジア言語文化論（通年） ・ ・
	大学院博士後期課程担当科目	<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・ ・
	通信教育部担当科目	<ul style="list-style-type: none"> ・神話伝承論（集中） ・ ・ ・
【研究上の特記事項】	<p>本年度は、国語国文学研究の最難関の雑誌『文学・語学』に論文が採用となった。また、折口信夫研究も業績を上げることができて満足している。一昨年執筆した『魂の古代学』（新潮社刊）は、角川財団学芸賞に選ばれており、高い評価を受けているので、今後とも折口信夫研究においても精進したいと思う。</p>	
【教育上の特記事項】	<p>授業においては、一昨年第一回のFD委員会の公開授業を担当することができたが、一昨年度も批判を受けた点を踏まえて授業改善を行った。</p>	
【社会的活動】	<p>平城宮跡の大極殿復元に関わる委員（国土交通省）や、飛鳥苑池遺構の復元の委員（奈良県）を務めた。また、創作では新作オペラが奈良100年会館と東京藝術大学で再演となり、制作・統括などを務めた。</p>	
【学内活動】 (学内職歴を含む)	<p>人事委員などを務めた。多忙の年であった。高校生歴史フォーラムの審査員となった。また、多くの高校において出張授業を行った。</p>	

研究業績[著書、学術論文等]				
著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
①				
②				
③				
④				
⑤				
(学術論文)				
①折口信夫の小説「生き口を問ふ女」と大阪言葉	単	2010/8/1	谷口貢・鈴木明子編『民俗文化の探究—倉石忠彦先生古稀記念論文集—』岩田書院	265頁～284頁。折口信夫の初期小説の大阪言葉を分析した。
②謡曲〈野守〉の文芸風土	単	2010/8/1	『観世』第77巻第8号、檜書店	36頁～45頁。謡曲〈野守〉が奈良の風土とどのように関わって成立したかを考察した。
③白川静の万葉論	単	2010/9/24	立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編『入門講座 白川静の世界Ⅱ 文学』、平凡社	144頁～160頁。白川静の万葉研究の特色を今日の万葉研究の水準から再評価、批判した論考。
④遣唐使と歌——平群広成と阿倍仲麻呂をめぐる夢想	単	2010/10/25	遣唐使船再現シンポジウム編『遣唐使の時代——時空を駆けた超人たち』角川学芸出版	73頁～101頁。同名シンポジウムでの口頭発表を踏まえ、天平5年遣唐使の関係歌について分析を行った。
⑤春日なる三笠の山に出でし月—平城京の東—	単	2010/11/1	『国語と国文学』第87巻第11号、東京大学国語国文学会	104頁～115頁。『古今集』阿倍仲麻呂歌の解釈について、これを平城京との関わりから分析を行った。
⑥「平城京研究と木簡研究の最前線」を終えて	単	2010/11/30	『上代文学』第105号、上代文学会	41頁～43頁。上代文学会として企画されたシンポジウムを司会者の立場で統括した。
⑦日本文学における自覚的「補完」—国文学者の肖像写真—	単	2010/11/30	『文学・語学』第198号、全国大学国語国文学会	30頁～43頁。同学会のシンポジウムで発表した内容に基づき、近代国文学の成立について再検討を行った。
⑧「万葉歌木簡と万葉集研究」(「馬場南遺跡が語るもの」シンポジウム記録)	単	2010/12/24	上田正昭監修・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編『天平びとの華と祈り—謎の神雄寺—』柳原出版	101頁～112頁。馬場南遺跡出土の歌木簡について、わかりやすく私見を改稿したもの。
⑨万葉びとの小さな旅	単	2011/3/1	『万葉古代学研究所年報』第9号	21頁～27頁。平城京内の宅と京外の庄とをどのように往来し、そこからどのような歌が生まれたかを考察した。

<p>(学会発表)</p> <p>①遣唐使と歌——平群広成と阿倍仲麻呂をめぐる夢想</p> <p>②日本文学における自覚的「補完」—国文学者の肖像写真—</p> <p>③春日なる三笠の山に出でし月—平城京の東—</p> <p>④</p> <p>⑤</p>		<p>2010/4/24</p> <p>2010/6/5</p> <p>2010/6/6</p>	<p>「遣唐使船再現プロジェクト 春日大社シンポジウム」角川文化振興財団主催</p> <p>全国大学国語国文学会夏季大会シンポジウム「日本文学における補完」</p> <p>全国大学国語国文学会夏季大会研究発表</p>	<p>天平5年の遣唐使関係歌の特質を分析した。</p> <p>明治期における「国文学」の概念の定義について考察した。</p> <p>阿部仲麻呂の有名歌の読解を、今日の万葉集研究の水準において試みた試論。</p>
<p>(その他)</p> <p>①</p> <p>②</p> <p>③</p> <p>④</p> <p>⑤</p>				